卓越大学院プログラム現地視察報告書（令和5年度）

卓越大学院プログラム委員会

機　　関　　名	大阪大学	整 理 番 号	１９１１
プログラム名称	多様な知の協奏による先導的量子ビーム応用卓越大学院プログラム		
プログラム責任者	深瀬　浩一	プログラムコーディネーター	中野 貴志

１．進捗状況概要

・プログラムへの応募者数は、R3 年度:18 名、R4 年度:20 名、R5 年度:29 名と順調に増えている。各プログラム担当教員の働きかけ、先輩学生の勧誘、ホームページ等による広報・情報提供の充実などの効果が出ていると思われる。

・他大学出身者や留学生が選抜で不利にならないようにするため、R5 年度は受講生の選抜試験を年２回実施した（実施時期については再検討する）。

・令和３年度から学生を受け入れ始めた医学系研究科保健学専攻に加え、令和５年度には情報科学研究科情報システム工学専攻と理学研究科高分子科学専攻の学生を２名ずつ受け入れ、「多様な知の協奏」の実現に向けて、多様なバックグラウンドと専門性を持った学生の勧誘が功を奏し始めている。

・年に６回程度のペースで開催されている卓越セミナーに加え、令和５年度には「PQBA Seminar Camp」が合宿形式で実施され、学生からも他分野の学生との交流がより深まったと高評価であった。

・ダブルメンター制については、ファーストメンターの担当教員を当初の１名から３名（うち１名は女性）へ増加させ、学生一人一人へのきめ細やかな対応が強化された。

・最終審査に学外委員を含めることとなった。

・研究室ローテーションについては、国内研修の一環として位置づけられ学生への周知も行われているが、インターンシップ等に比べ学生からは選ばれにくい状況にある。

・連携先企業や機関は徐々に拡大（プログラム発足当初から、大学と企業がそれぞれ 2 増）しており、各連携先の本プログラムへのコミットメントは大きい。

・中間評価結果等を踏まえた見直し計画(案)については、全体的に妥当であり、成果も出始めている。

【大学院教育全体の改革への取組状況】

・全学的な大学院教育改革への取り組みについては、総長を機構長とする国際共創大学院学位プログラム推進機構によって双翼型大学院教育システム DWAA（学際融合や社会連携に基づいたカリキュラム・指導体制）によって「知のジムナスティックス」プログラムの実現を目指した実効的な取り組みにより着実に進められている。

・本卓越プログラムは、阪大独自の学際融合や社会と知の統合を先導する役割を担っている。

・理工情報系オナー大学院プログラムに加え、人文社会科学系オナー大学院プログラム（令和６年度から各横断型ユニットにおけるプログラム提供を開始予定）の充実を図り、理工系の学生の受け入れ体制も整えている。

・SPRING 事業やフェローシップ事業によって奨学金等の経済支援の拡充が図られている。

・「インターンシップ・オン・キャンパス」という構想に基づき、企業と阪大による学

内活動拠点である協働研究所によって、研究指導体制やリスキリング教育の多様化が促進されている。

２．意見（改善を要する点、実施した助言等）

・国内・海外研修については、本プログラムを通じて機会や経済支援が得られることに対して面談した６名の学生の満足度は総じて高かった。

・国内研修としての企業等でのインターンシップや研究室ローテーションの一覧表(学生の学年、期間、相手先企業・研究室等）を示してもらいたい。

・面談した学生は、本プログラムによって提供される講義や卓越セミナーには概ね満足しているようであるが、すべての学生が卓越セミナーで発表している訳ではないので、卓越セミナーに限らず、学生が互いから学び合い切磋琢磨できる機会を増やすことが望まれる。例えば、各学生は、修士および博士後期課程の２回、従来の半分程度の発表時間の義務を課し、プログラム学生の聴講や学部生への案内を促すなどの検討も効果があると思われる。

・卓越セミナー等における異分野交流や多様な知の融合のための活動を、学生だけに任せるのではなく、より多くの教員が参加しメンターやファシリテーターとなることを通じて、このような活動のロールモデルやリーダーシップを示せるのではないか。

・特に令和５年度に実施され学生に好評であった「PQBA Seminar Camp」のような、インフォーマルな形で互いに深く知的な交流ができる場がもっと欲しいという声が学生たちから聞かれた。

・令和４年度は、KPI に掲げられている分野横断型のシンポジウムや国際ワークショップが未開催だったので、令和５年度には開催されることが望まれる。

・学生からは、研究室ローテーションで他の研究室に飛び込んでいくのは敷居が高いが、他の研究室の学生（や指導教員・メンター）と共同研究をする際に資金援助をしてもらえると助かるという要望があった。プログラム運営側としては、そのような資金援助は用意されているということだったので、学生たちへのさらなる周知や「知の融合や協奏」を促進する可能性のある共同研究の奨励などに取り組んでもらいたい。

・やみくもに武者修行的な研究室ローテーションを促進すればよいということではなく、目的を持って研究室ローテーションを利用したい学生をどのように支援できるかについて検討してもらいたい。

・「知の融合」や「多様な知の協奏」を実質化する仕掛けや機会がやや薄い印象がある。インターシップ先や研究室ローテーション等は、自分の専門に関連もしくは延長線上で決める学生が多いので、「知の融合」や「多様な知の協奏」を実質化する機会を増やし、学生が積極的に関わり、異分野からの学びを自らの研究に融合し発展させていくための仕掛けをさらに強化する必要がある。